

いよいよ二十二年五月帰国ということになり、チタ收容所、ナホトカ收容所を経て、六月二十二日ナホトカ港を出た。

舞鶴入港二十五日、二十六日上陸、生きて帰り着いた。同時に、港内を星条旗をつけたボートが走っているのを見て、敗戦国だという実感がわいた。

そうそう收容所にいたころの話だが、二十一年十二月にハバロフスクで編集発行している日本字新聞を見た。その記事に日本で大地震があり、室戸岬の灯台が海没したという見出しが目に入った。

そこで舞鶴に上陸したとき、援護局の係官に高知県の状況を聞いた。自分の家が海没したんじゃないだろうかという、そんなばかなことはありませんよ、と笑われた。

高知の町が空襲を受けて焼け野が原になったということは、大阪の兄の家へ寄ったときに聞いた。

生まれ故郷の宇佐の町へ七月一日帰ると、家内も無事に満州から引き揚げて帰ってきていたので、ほっとしたことだった。

悔恨の思いで

岐阜県 厚見 茂

北満チャムス在住の日本人、最後のハルビンへ向かって避難する列車に同乗して、邦人警護の命令を受けて西進し、八月十八日朝、綏化駅で初めて日本は十五日、無条件降伏との悲報に接し、直ちに全員下車、綏化飛行場の格納庫に收容され、敗者の哀れな生活が始まった。

やがて、ソ連による武装解除、日本軍の糧秣をソ連へ運ぶための貨車積みに狩り出され、齒をくいしばって黙々と従った。

ソ連は、軍人のみはウラジオストック回りで帰国させるから、それまではソ連の指示に従えとの甘言で、日本兵の暴動、逃亡を押さえていたらしいが、部下には何も告げず、少しでも心を休めている姿を見守って、軍歴は少ないが、応召のときは士官勤務適任証書を受領していたため、これからが頭を使わねばならぬと重責を自覚し

たのである。

九月十八日、黒河から黒龍江を渡り、ブラゴエシチェンスクへ向かうため、緩化を後にし、十月一日ソ連入り、露宮第一夜に、隣のテントの山梨県出身の某二等兵が、深夜小便のため誤って糧秣を積んであるところへ行き、ソ連の歩哨に銃殺され、入ソ第一号の犠牲者となった。

十月五日、いよいよブラゴエを出発、言われるままに乗車、みんなは祖国に帰国と喜び勇んで車上の人となったが、貨車の上部の窓からの太陽の光線で、どうもウラジオ方向ではなく、西へ西へと走っていることがわかり、兵の不安と心の乱れが募り始めた。

かくありなんと予想していた私は「いろいろな不安もあるだろうが、心を落ち着けて今日からは浮いたかひょうたんの気持ちで、俺の指示を守ってくれ」と心を込めてさとした。

途中、一日中食事も取れないときもあった。十三日目に、エニセー西岸のクラスノヤルスクに到着、下車を命ぜられた。

落胆、疲弊の兵に向かって、「ここは言葉のゴロでは暮

らしやすいようだなあ」と気分転換もまじえて、駅前の大衆浴場で久しぶりにあか落としを済まし、ソ連兵の案内で、第五ラーゲルまで行軍。

このラーゲルは元少年監獄であつたらしく、二段式一棟二百人収容、ベッドは粗末だったが、奥地で掘つ立て小屋で、重労働に服した友軍よりは恵まれていた。

ただ、便所だけは、広い空地に深い穴を掘り、長い板を二枚渡し、幾列か全員が並んで、恥も外聞もなく使うほかはなく、時折当番制で清掃作業をし、いやな仕事でも努めて樂觀的にやっていた。もちろん落とし紙はなく、悲哀のどん底生活を我慢した。

南京虫やシラミに悩まされたことは、どこも同様、最も兵の苦痛は痔病と神経痛患者で、体温三十八度以上でなければ病人と見なさず、作業へ出された。やむなく小隊長の一存で作業場で弁当の監視役をさせ、仕事は休業。そのかわり隊長も兵と同様作業をし、ノルマ向上の一翼を担ったつもりでいた。

あるとき、そのことが所長の知るところとなり、夕方連隊長同道で、所長に呼び出され、「小隊長が仕事をして

いるらしいが、隊長は仕事をせず、部下の巡視をし、ノルマを上げよ」と厳しく叱られた。私も負けてはおらず「厚見小隊は関東軍であります。隊長が作業をやっておれば、兵隊は見回らなくても一層よく働きます。」所長曰く「ニュート、ニュート、ソ連へ来たらソ連の規則に従え」と幾度となく繰り返し問答で引き下がらないので、連隊長は「お前の言うことは俺にはよくわかるが、奴さんには理解できない。もうこの辺で上手に言え」とのこととで、やむなく命に従った。

我が小隊は主として建築の労役であったが、大工の経験皆無の終戦直前の応召兵で、協力一致の行動をとるには、愛情と信頼が隊長の必須条件であると、体の重労働、頭の重労働の違いはあっても、苦勞は同一と決意した。

作業の初めのうちは、監督ものろろしている兵を突き倒したり、巡回をしていたが、私は大喝一声「俺の部下を監督自ら手を出すとは何事か、必要なときは俺にいえ」と手出しを戒めた。

その後は対等で、監督の部屋で私の話題、ソ連の話をかわし、一日一度の巡回を毎日の例としたが、ソ連語の

不十分な私の話題を伝えることは容易ではなかった。

そのため、毎朝の挨拶、作業分担指示等は、監督を尊敬の態度で行い、我が小隊の信頼されることを忘れなかった。

時々連隊長、通訊同道で、所長が現場視察のときも、現役当時のおりの正しい態度で報告をし、関東軍の上官に対する礼儀で信頼を得た。

作業で最も苦しかったことは、夜遅く時間外貨車の荷おろしで、日本の二倍の大きさの貨車に満載されている粉炭を円び一丁で長時間かかって、真っ黒になっておろすことは、重労働中最も苦しいもので、ヘトヘトになって帰り、翌日も平常どおりで、睡眠不足と空腹で最悪のものだった。

翌朝、開門前に私は、昨夜の礼を述べ、「母国で両親・妻子が陰膳を供えて、一日も早く生きて帰国を待ちわびておられることを寸時も忘れないで、元氣を出して辛抱してくれ」と、もみじのような手を合わせ、無事で帰りを待っている我が子の姿を思い浮かべつつ、切々と涙ながらにさすと、一同神妙な顔で聞いてくれた。

やがて、歩哨の合図で、五列縦隊の小隊は、屠殺場へ引かれる羊のごとく、黙々と作業場へ向かう姿は、体験者ならではわからぬ苦痛であつた。

二年目にはいつて、中隊全員で四階建て四十戸分の高級れんがづくりマンションを約一年間で完成した。作業中、最も苦しかったことは、地下三メートル凍るところのため、一メートル四角、三メートルの深さまでの基礎掘りを円びと鉄棒のみで仕上げる難作業で、一日三百五十グラムの黒パンと燕麦のおかゆの食糧では、日ごと衰弱が目に見えた。

二十二年四月になって、弱い者四百五十人がダモイの第一陣と発表され、将校は後にし、下士官の私が検診の結果、右肺が真っ黒であつたので、引き揚げ責任者として、辛苦の思い出のラーゲルを、お礼の挨拶を終わりに、踊る心を押さえて帰国の途に着いた。

懐かしい祖国へダモイの喜びの車中、一人が停車時に盗みをしたことが、ゲーペーウーの発見するところとなり、「あの兵はダモイはできない。即刻元のラーゲルに戻す」という。幾度か許しを嘆願したが、聞いてくれない。

やむなく最後に「どうしても駄目なら責任者の俺を返してくれ」と頭を下げたら、彼も人の子「それほど言うなら今度だけは許してやる」とダモイをともにすることができた。責任者としては、寸時も油断はできないと、いままさらながら痛感した。

ナホトカでの第一から第三の関所を経て、待望の舞鶴上陸は、五月十日、久しぶりに見る新緑の祖国の土を涙とともに踏みしめて、復員手続きを終わりに、懐かしい我が家に、親族に迎えられて着くことができた。

ソ連に連行されて

東京都 三井 清

それは十一月初旬の日だった。明日出発とソ連軍より命令があり、十一月十日ころ、鞍山駅を出発した。約四十五日間の汽車の旅だった。おろされた場所は、十二月半ば過ぎなのに、草などは青く暖かく、かなり南に来ていると感じた。約一時間くらい歩いて収容所に入った。